

共同研究 ● 驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に—— (2010-2013)

本研究会に関する報告は、本号で最後になる。最後の2回の研究会では、テキストとして、あるいはモノとしての「驚異」を集めて分類し、知識として体系化するという行為について検証した。さらに論文集出版に向けての協議も行った。

驚異の編纂

2012年12月9日には大沼由布(同志社大学)が「知識の集約と編纂：ヴァンサン・ド・ボーヴェの『大いなる鏡』」を発表する予定であったが、体調不良のため欠席し、筆者が原稿を代読した。

13世紀のドミニコ会修道士ヴァンサン・ド・ボーヴェが、フランス王ルイ9世の援助を得て編纂した『大いなる鏡』*Speculum maius*は、神学中心の百科事典としては最大にして最後のものとされる。当時の学問的知識の集大成であり、神の計画した世界を書物に写し取るという本書の意図が、題名の「鏡」(*speculum*)という言葉に表れている。この大部な著書は『自然の鏡』、『諸学の鏡』、『歴史の鏡』、『道徳の鏡』の4巻に分かれており、情報自体の多さから驚異譚も数多く含まれる。

ヴァンサン・ド・ボーヴェ以前、つまり11世紀から13世紀初頭にかけては、ティルベリのゲルワシウスやウェールズのジェラルドの著作に見られるように、不可思議な生きものや現象に関する話が、それを「見た」という人物から伝わった「こんな奇妙なことがあるらしい」という話として語られていた。『大いなる鏡』には、そうした情報が百科事典という文脈に置き換えられ、知識として体系化されてゆく過程が見て取れる。このプロセスにおいて驚異に学問的な意味付けがされ、自然界での位置づけがなされ、純粋な「驚き」の度合

いは薄れる。さらにこの後の時代、14世紀、15世紀になると、娯楽・ファンタジーとしての驚異譚が台頭してくる。

次に、見市雅俊(中央大学)が『「驚異」から『好奇心』へ——ロバート・プロットと17世紀イギリスの自然誌』と題して発表した。近世イギリスの自然科学者プロットは、中世の一元的世界像(神の摂理)と近代の科学的合理主義の間の、過渡期の知の在り様を体現した人物だと見市は言う。プロットの『スタッフォードシャー州自然誌』は、彼自身によるフィールドワークと同好の士との情報交換によって得られた、奇形、ミステリーサークル、化石など、身近な自然の驚異についての著述に満ちている。驚異も神の創造物であるという中世的な自然観とも、18世紀以降の自然科学的解説でもない自然・世界に対する「柔らかな」視線があると見市は述べる。

プロットはまた、アシュモリアン博物館の創設(1683年開館)に関わり、初代館長を務めた人物でもある。特権階級の「驚異の部屋」の珍品コレクションを公共の「博物館」へと転換する動きは、ヨーロッパ全土に広がってゆく。

最後に、守川知子(北海道大学)が「トゥースィーのペルシア語著作『被造物の驚異』と12世紀の西アジア社会——「イスラーム的宇宙観」による初の百科全書編纂の時代——」を発表した。12世紀後半、ペルシア語で編纂され、セルジューク朝君主に献辞された『被造物の驚異』は、中東の百科全書としては最も早い例とされる。序文と全10部から構成され、天のものから地のものへ、大きいものから小さいものへという順で、自然界が説明されてゆく。一世紀ほど後のカズウィーニーの同名著書に構想や内容が引き継がれていくが、カズウィーニーの比較的ドライな情報の記述に比べると、トゥースィーの著作には娯楽的な逸話の挿入も多い。本書に多く含まれる驚異譚は読者を飽きさせない工夫でもあったと守川は言う。

著者はスンナ派であり、彼がアラビア語やペルシア語の多様な文献から引いてきた情報を再編纂し、神が創造したあらゆる「被造物」を知る事典を作成した背景には、当時勢力を拡大していたシーア派に対抗するスンナ派擁護の理論普及を目指してセルジューク朝が各地に設立したニザーミーヤ学院があるという。本書では不思議な被造物も変わった事象も、全て神の思し召しと位置づけられている。

驚異の蒐集

2013年6月30日に中央大学駿河台記念館で開催した研究会のトピックは「驚異の蒐集」とし、知識としてだけではなく、「モノ」としての驚異の物質性に迫った。

まずは、インド留学から帰国した小倉智史(京都大学)が、「ムガル宮廷における驚異なモノの蒐集」と題して、ムガル朝前半期の王族たち、とくに第3代君主のアクバル(治世1556-1605)や、第4代君主のジャハーンギール(治世1605-1627)がどのような珍しいモノを集めたのかを明らか



ハレ(ドイツ)のフランケ財団(孤児院が起源の学問施設)の驚異の部屋。1990年代まではこの部屋が存在もほとんど忘れ去られていたが、東西ドイツ統合以降、復元された(2012年撮影)。

にしようとした。カタログ的な資料がないため、どのようなモノが蒐集されたかを体系的に理解することは困難であることがまずわかった。しかし当時のムガル朝において、ジャイナ教などの官吏がサンスクリット語で書いた資料はほとんど研究の対象となっていないらしいので、今後の研究の余地がまだまだある課題である。

このような制約がある中で小倉が蒐集されたモノの事例として提供したのは、挿絵入りの書物や絵画といった美術品である。特に、ヨーロッパからもたらされた絵画（王族の肖像画や宗教画）は珍重されたという。

この発表をふまえた議論では、後述する大航海時代以降のヨーロッパの場合と比べて同時代の中東では、遠方の珍しいモノを蒐集し、陳列し、場合によっては研究の対象とするという行為がさほど顕著に見られないとしたら、何故なのか、という問題が検討された。

モノのコレクションとテキストの関係性について、高橋三和子（慶応大学）が、「近代初期イギリスにおける珍品陳列室—メタファーとしてのキャビネット」と題して発表した。本発表ではイギリスにおける珍品蒐集の発展、コレクションのカタログ化、そしてメタファーとしてのキャビネット概念の発展が考察された。

近代初期イギリスにおいては、世界中から集められた珍品が *cabinet of curiosities* と呼ばれる陳列室に置かれた。その空間構成がやがて書物の記述スタイルに引き継がれると高橋は論じる。17-18 世紀イギリスでは「…のキャビネット」と題されたテキストが多数出版される。それらは、1つのテキストや章に雑多なトピックが含まれるという構成の書で、大別して、世の森羅万象をキャビネットのアイテムのように記述するものと、特定の分野（主婦の家事など）における様々な事象を列挙するものの2つの傾向がある。キャビネットにおける空間構成を読者が認識していたからこそ、書き手はメタファーとして用いることができたのではないかと高橋は述べる。

最後に「愉悦の蒐集—ヴンダーカンマー論—」と題して小宮正安（横浜国立大学）が、大陸側ヨーロッパ各地の「ヴンダーカンマー」を紹介し、その在り方の変遷を追った。ドイツ語圏の *Wunderkammer*（驚異の部屋）は、前述のイギリスの *cabinet of curiosities*（珍品陳列室）と同じように、特権階級が世界中から集めたモノとしての驚異（珍しい動物のはく製、奇形の標本、鉱物、民族資料、遺物など）を陳列し、見せびらかす部屋であった。

マニエリスムの時代（16世紀半ばごろ）に発展したヴンダーカンマーが、バロック時代（17世紀）に意味が変容すると小宮は説明した。空間が大きくなり、豪華主義も強まり、マニエリスム時代の「いかがわしさ」が失われた。大衆化が進み、公開が前提となる現代の博物館につながるものもできる一方で、単体のキャビネット（引き出しや棚が付いた陳列箱）を用いるミニチュア・ヴンダーカンマーも出現する。バ



カッセル（ドイツ）の自然史博物館に再現されたカール方伯の驚異の部屋。ジオラマ風に方伯の蠟人形まで再現されている（2013年撮影）。

ロック期には、宇宙の神秘を作るもの＝神の模倣という概念が次第に失われていった。

さらに科学革命を経て、18世紀後半のコレクションは博物館的なものになり、まがいものの蒐集は行われなくなった。ナポレオンの時代にヴンダーカンマーの多くが破壊されるが、それは、かつての権力層のものを接収するという意味だけでなく、王侯貴族の前近代的な価値観を破壊する意図もあったという。接収されたものは、自然物は自然史博物館に、人工物は美術館にとそれぞれ振り分けられる。そうでないものは二束三文で売られるか破壊された。このような経緯から、往時の姿のまま現存するヴンダーカンマーはごくわずかだが、小宮は何らかの形で残っている、あるいは近年再現されたヨーロッパの驚異の部屋の多くを自ら実地に調査しており、現地の写真が見応えがあった。

成果刊行に向けて

2013年11月9日に行われた最後の研究会では、成果刊行に向けての具体的な議論が行われ、『《驚異》の比較文化史』という仮題の論文集の章立てがほぼ固まった。1冊の本の構成として、3年半の共同研究期間を振り返ってみると、中東とヨーロッパの比較すべき要点は、かなりおさえられたかと考える。しかし、中世的な驚異の黄昏期、つまり近世・近代へのつながりに関しては、中東での展開がヨーロッパの場合ほど明確に見えてこないという課題が残った。出版物においてはその部分を補えるよう、代表がメンバー外の執筆者と交渉中である。名古屋大学出版会とともに出版計画をまとめ、2015年度には刊行の予定である。

やまなか ゆりこ

国立民族学博物館民族文化研究部准教授。専門は比較文学比較文化。単著『アレクサンドロス変相：古代から中世イスラムへ』（名古屋大学出版会 2009年）が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。